翻訳者紹介（五十音順）

愛甲　恵子（あいこう　けいこ）

一九七六年生まれ。東京外国語大学地域文化研究科博士前期課程修了後テヘランに留学。その際イランの絵本の豊かな世界を知りました。帰国後の二〇〇四年から、美術家の藤田夢香とともに「サラーム・サラーム」という名で、イランの絵本やイラストレーターを紹介する展覧会を各地で開催しています。既に十年以上になる絵本との付き合いですが、最近の興味は絵本と詩の関係です。自分の中にもある「詩は難しい」というイメージを覆したく、イベント等を通じて「詩の楽しみ方」を模索中。音楽のように詩（うた）を楽しみたいです。

訳書には、今回のシャリーフィヤーンの詩を訳した『黒いチューリップのうた』（ネイチャーブリス、二〇一〇年）の他、『ごきぶりねえさんどこいくの？』『フルーツちゃん！』『すずめの空』（いずれも絵本。P-vine Books、二〇〇六年）などがあります。

石井　啓一郎（いしい　けいいちろう）

一九六三年一一月一五日、東京生れ。上智大学外国語学部イスパニア語学科卒業。大学時代はスペイン古典文学を愛しながらも、イスラーム世界に惹かれるまま、気付けば「アル・アンダルス」から地中海を東へ東へと中東・西南アジアへと遍歴を続けていた。いつしか企業勤務の傍らで、イラン、トルコ現代文学の翻訳研究を「好きの一念」「下手の横好き」だけで続けて現在に至る。

訳書にサーデグ・ヘダーヤト『生埋め～ある狂人の手記より』（国書刊行会、二〇〇〇年）、『サーデグ・ヘダーヤト短篇集』（慧文社　二〇〇七年）、ナーズム・ヒクメット『フェルハドとシリン』（慧文社、二〇〇二年）、寄稿『イラン研究万華鏡』（原隆一・中村菜穂編　大東文化大学東洋研究所、二〇一七）

石川　清子（いしかわ　きよこ）

もともとフランス文学専攻で、シュルレアリスムやヌーヴォー・ロマンの作家が好きでしたが、一九八〇年代の終わり頃、アルジェリアの歌謡曲、ライに夢中になって地中海の向こう側に興味をもち、マグレブ（北アフリカ）の仏語作家を読み始め現在に至っています。ゴンクール賞受賞前のタハール・ベン・ジェルーンを導きの糸として今、アシア・ジェバール、レイラ・セバールらの女性作家の周囲を追いかけています。のめりこんだおかげでベン・ジェルーン『不在者の祈り』（国書刊行会）、ジェバール『愛、ファンタジア』（みすず書房）を訳すことができました。北アフリカではありませんが、レーモン・クノー『イカロスの飛行』（水声社）は苦労しました。翻訳を出すことは日本における研究を根づかせる意味で大切ですが、創作と同等の価値ある仕事だと思っています。マグレブ文学研究会のメンバーが主軸になって、北アフリカ現代文学の翻訳コレクション〈エル・アトラス〉（水声社）の刊行が昨秋から始まりました。今回ここに訳したベンギギ『移民の記憶』も文学作品として刊行予定です。息の長いシリーズにしていきたいです。

磯部　加代子（いそべ　かよこ）

一九七三年生まれ。一九九九年から二〇〇一年までトルコのイスタンブル在住。二〇〇二年から二〇〇五年まで日本のトルコ企業に勤務。二〇〇三年より日本のクルド人難民たちの通訳を行う。二〇一二年「クルド文学研究会」を立ち上げる（どなたでも参加できます。興味のある方はお気軽に磯部までご連絡ください（kako118@syd.odn.ne.jp）。

トルコ語を学び始めた当初よりトルコのクルド問題に関心を抱く。イスタンブル在住時には、クルド人問題のトルコにおける抜き差しならない根深さを知るも、日本でこの分野での研究がほとんど存在しないことに愕然とする。クルド人作家として抜群の知名度を誇るメフメッド・ウズン、ノーベル文学賞候補に幾度となくあがるもいまだ受賞歴のない文豪ヤシャル・ケマルらはもちろんのこと、スザン・サマンジュや、ヤウズ・エキンジなど、それぞれに限りない読書の喜びを味わわせてくれるクルド人作家たちに出会い、これらの作品を一人で味わうことの寂しさを解消したく「クルド文学研究会」を発足、「クルド文学」を言語や国境で区切ることなく広く定義し、その魅力、困難、情熱を日本に紹介していきたい。

著書に『旅の指さし会話帳18 トルコ』（情報センター出版局、二〇〇一年）。訳書にオルサー・ラマザン『魂の視線～光の教師からあなたへ真実のメッセージ』（高木書房、二〇一一年）

鵜戸　聡（うど　さとし）

南九州出身。東大駒場に干支が一回りするほど学んでようやく博士号を取得（地域文化研究専攻）。学位論文はアルジェリアの作家を論じた「コスモグラフィーとしてのカテブ・ヤシン作品―アフリカ性と民衆の詩学」。マグレブやレヴァントの仏語文学を主に研究してきましたが、アルジェリアのアラビア語小説の紹介が目下の課題。地域としての仏語圏を軸にして、東アジア（台湾・朝鮮）との比較を交えつつ、アラブ＝ベルベル文学を多言語的に理解して行きたいと考えています。なおアルジェリア独立五十周年を機に「マグレブ文学研究会」を立ち上げました。会員随時募集中です。

雑文は方々に書き散らしていますが、専門的な興味をお持ちの方は「アラブ・フランコフォニーと越境の詩学」土屋勝彦『反響する文学』（風媒社、二〇一一年）などご覧下さい。ハンガリーのチャイナ・ファンタジーも翻訳しているのでそちらもヨロシク（『時間はだれも待ってくれない』東京創元社、二〇一一年）。

岡﨑　弘樹（おかざき　ひろき）

一九七五年生まれ。専門はアラブ近代政治・文学思想。二〇〇三年から〇九年にかけて仏研究所研究員や日本大使館の政務アタッシェとしてダマスカスに滞在。元政治犯らと飲み明かす中で、彼らの生命力と自己批判精神に感銘。パリ第三大学アラブ研究科で社会学博士号を取得。博論の題名は「アラブのナフダ時代における専制批判―個別性から普遍性へ」。一九世紀末から二〇世紀初頭のアラブの作家らが政治評論と同時に文学作品も多々残したことにも着目した（拙著「アブドゥッラー・ナディームにおける『金持ちの専制批判』」（『中東学会年報』Vol. 32―1などをご参考）。最近は、一九七〇年代以降のシリアの政治思想や文学（特に監獄文学や政治演劇）、記録映画にも研究対象を広げている。

岡　真理（おかまり）

一九六〇年生まれ。専門は現代アラブ文学。東京外国語大学アラビア語科でアラビア語とアラブ文学を学び、学部四年のときにエジプト・カイロ大学に留学（一九八二・八三年）。修士課程修了後、一九八八年から九一年まで、在モロッコ日本国大使館に専門調査員として三年ほど勤務しました。現在は、京都大学大学院人間・環境学研究科の教員として、アラビア語と、ポストコロニアル思想文化の一環としてパレスチナ問題などを教えています。学部生のとき、ガッサーン・カナファーニーの『太陽の男たち／ハイファに戻って』を読んで大きな衝撃を受け、文学を通してパレスチナ問題を思想的に考えたいと文学の道を志しました。翻訳は、『季刊 前夜』（二〇〇四

―二〇〇八年）にカナファーニーの短編いくつかと「ハイファーに戻って」の新訳を連載。ほかにターハル・ベン＝ジェルーン『火によって』（原作仏語、以文社、二〇一二年）など。著書として『アラブ　祈りとしての文学』（みすず書房、二〇〇八年）ほか。

栗原　俊秀（くりはら　としひで）

一九八三年、東京生まれ。イタリア文学。京都大学総合人間学部、同大学院人間・環境学研究科を経て、イタリアに留学。カラブリア大学文学部専門課程近代文献学コース卒業。これまでに、「イタリアと移民」に関係する文学作品を複数翻訳してきました。「ヨーロッパの玄関口」であるイタリアは、昔からアラブ世界と付き合いの深かった土地です。日本ではあまり知られていないイタリアの側面を、今後も継続的に紹介していきたく思っています。

小泉　純一（こいずみ　じゅんいち）

現代アメリカ詩を専門とする。日本福祉大学教授。T.S.エリオットやエズラ・パウンドなどのモダニズムの研究を行ったのち、ビリー・コリンズなどの同時代に活躍する詩人の研究に進み、湾岸戦争やニューヨークで起きた9・11の多発テロ攻撃に対する文学者の反戦活動、反戦の作品を研究する中で、ネオミ・シーハブ・ナイやスヘイル・ハンマードなどのパレスチナ系アメリカ人作家の作品に出会い、研究者として果たすべき責任を感じた。翻訳書には『ビリー・コリンズ詩選集：エミリー・ディキンスンの着衣を剥ぐ』（思潮社）、ネオミの自伝的小説『ハビービー：私のパレスチナ』（北星堂）、研究書には『アメリカに響くパレスチナの声』（水声社）などがある。

新郷　啓子（しんごう　けいこ）

一九五〇年生まれ。フランスとスペインに暮らして三十七年になります。西サハラとの関わりはフランス在住の時からで、早や三十四年が過ぎました。支援団体での活動はもとより、戦闘が続いていた時代にパリのポリサリオ戦線代表部を手伝い、ドキュメンタリー制作のためテレビ班に同行して前線に滞在するなど、振り返ってみれば自分には貴い経験の数々です。そして今回は詩人の手記抄訳という、今までになかった分野で西サハラを紹介させていただきました。著書『蜃気楼の共和国？』（現代企画室、一九九三年）、共訳書『チェルノブイリの犯罪』（緑風出版、二〇一五年）

鈴木　克己（すずき　かつみ）

一九六四年生まれ。東京慈恵会医科大学准教授。医学部医学科に籍を置いているが、医師ではない。大学ではドイツ語とヨーロッパ文化の授業を担当している。イギリス医学を範とする大学にあってドイツ系に属すとなれば、傍流中の傍流。またドイツ文学でも「移民を背景にもつ作家」を専門とするので、これまた傍流。その川が流れ流れて中東へと至った次第。

著書として『現代ヨーロッパ文学の動向』（共著、中央大学出版、一九九六）、『聖書を彩る女性たち』（共著、毎日新聞社、二〇〇二）、『知っておきたいドイツ文学』（共著、明治書院、二〇一一）。

鈴木　珠里（すずき　しゅり）

東京外国語大学地域文化研究科博士課程前期修了。イラン現代文学における女性詩人の作品を中心に研究。大東文化大学国際関係学部・中央大学総合政策学部非常勤講師。主な出版物として、『古鏡の沈黙』（ジャーレ〔アーラム＝タージ・ガーエムマガーミー〕著・共訳・未知谷、二〇一二年）、『現代イラン詩集』（共編訳・土曜美術出版販売、二〇〇九年）、『イランを知るための65章』（共編著・明石書

店　二〇〇四年）。

篁　日向子（たかむら　ひなこ）

一九八九年長野県生まれ。東京外国語大学総合国際学研究科博士前期課程修了。研究の世界を離れたものの、大好きな作家の作品を翻訳し掲載する機会をいただき、このご縁に心から感謝しています。

田浪　亜央江（たなみ　あおえ）

東京外国語大学アラビア語学科時代にシリアに留学し、パレスチナ難民の家庭に下宿して以降、パレスチナ問題に関心をもってきました。一橋大学言語社会研究科修士課程を終了。博士課程在学中にイスラエルのアラブ・コミュニティの調査を目的にイスラエルに留学するものの、博論を提出しないまま気がつけば生活に追われてきました。国際交流基金中東担当専門員、いろいろな大学の非常勤講師、成蹊大学アジア太平洋研究センター主任研究員を経て、二〇一七年四月から広島市立大学国際学部で教鞭をとる予定。ずっと現代のことに関心をもってきましたが、この二年ほど急にオスマン末期から委任統治期にかけての文化活動やコミュニケーションのあり方が面白いと思うようになり、にわか勉強で博論を作成中です。領域意識を持たなかったこの時代の人たちが、「パレスチナ」にアイデンティティを持つようになるまでの意識の変化みたいなものに興味を持っています。

中村　菜穂（なかむら　なほ）

岩手県出身、一九八一年生まれ。ペルシア文学に憧れて大阪外国語大学でペルシア語を学び、その後、東京外国語大学大学院に進学、文学における比喩の研究に取り掛かり、大学院を満期退学して現在に至る。寄稿論集『イランとイスラム』（森茂男編、春風社、二〇一〇年）、『イラン研究 万華鏡』（共編、東洋研究所、二〇一六年）、翻訳『現代イラン詩集』（共訳、土曜美術社出版販売、二〇〇九年）、ジャーレ（アーラム＝タージ・ガーエムマガーミー）『古鏡の沈黙』（ザフラー・ターヘリー解説、共訳、未知谷、二〇一二年）、アハヴァーネ＝サーレス「詩人の大群」『文芸思潮』（第四九号）。

林嵜　伸二（はやしざき　しんじ）

京都大学人間環境学研究科博士後期課程単位取得退学。ベルリン自由大学留学。「カフカ文学における異文化性とユダヤ性」というテーマの事例研究で、第十一回日本オーストリア文学会賞（論文部門）。現在、複数大学で非常勤講師。ここ数年は、「現代ドイツの異文化像（トルコ像、キューバ像など）」、「ポストメディウム時代の文学」というテーマにも取り組んでいる。業績としては、『Die Rebellion des Otto Gross』（共著、Literaturwissenschaf.de、二〇〇八年）、『カフカ後期作品論集』（共著、同学社、二〇一六年）、ヴィクトール・フランクル著『もうひとつの〈夜と霧〉 ビルケンヴァルトの共時空間』（共訳、ミネルヴァ書房、近刊）など。

福田　義昭（ふくだ　よしあき）

一九六九年生まれ。大阪外国語大学大学院（言語社会研究科）博士後期課程修了。アラビア語・アラブ文学。現在、大阪大学大学院（言語文化研究科）講師。二十代のころ、エジプトのカイロとシリアのダマスカスにそれぞれ二年ほど暮らしました。両国に大きな愛着を感じていますが、読んでいる文学作品はエジプトに偏りがちです。昭和戦前・戦中期から戦後にかけて地元の神戸に暮らしていた外国人ムスリムのことも調べています。近著は、「アラブ世界の夢文化とナギーブ・マフフーズの夢文学」（荒木浩編著『夢と表象——眠りとこころの比較文化史』勉誠出版、二〇一七年、二〇〇—二〇五頁）、「昭和期の

日本文学における在日ムスリムの表象（2）——神戸篇（前篇）」（『アジア文化研究所研究年報』［東洋大学アジア文化研究所］第51号［2016］、二〇一七年、129（308）— 108（329）頁）などです。

藤元　優子（ふじもと　ゆうこ）

留学中に一九七九年のイラン革命に遭遇、全学ストの暇に飽かせて書店巡り、手に取った小説がきっかけで現代文学の世界に足を踏み入れることになった。第一歩はジャラール・アーレ＝アフマドという社会派作家を扱ったが、近年は元気な女性作家群に焦点を当てて研究してきた。若い同僚たちと『すばる』（二〇〇八年一二月号）に「イラン女性文学」特集を組むことができたのをきっかけに、七人の作家の作品を一編ずつ集めた訳書『天空の家—イラン女性作家選—』（段々社、二〇一四年）を出版。

細田　和江（ほそだ　かずえ）

中央大学大学院総合政策研究科総合政策専攻博士後期課程修了・博士（学術）。大学共同利用法人人間文化研究機構・総合人間文化研究推進センター研究員／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特任助教。

専門はイスラエル文学・文化で、特にイスラエル内部の周縁的な文化全般、特にアラブ系の背景をもつ文化に興味がある。最近の論考として「ヘブライ文学からイスラエル文学への系譜：イスラエルのアラブ圏作家とパレスチナ・アラブ人作家による新たな潮流」（『ユダヤ・イスラエル研究』三〇号、二〇一六）がある。

前田　君江（まえだ　きみえ）

東京大学非常勤講師。イラン・ペルシア語現代詩の研究をはじめとし、トルコ、イラン、アラブ首長国連邦、シリアなど中東の絵本と《イスラーム絵本》の調査・研究を行っている。共訳書に『現代イラン詩集』（土曜美術社出版販売、二〇〇九）。翻訳絵本に『ラマダンのお月さま』（解放出版社、二〇一六）、『イードのおくりもの』（光村教育図書、二〇一七年四月刊行予定）。また、本科研による海外派遣に基づく調査報告として、「グルジア（ジョージア）絵本の現在」『絵本学』（絵本学会研究紀要）第一九号（二〇一七年三月掲載予定）。

三谷　惠子（みたに　けいこ）

専門は言語学、スラヴ語学。二〇一二年度まで京都大学人間・環境学研究科教授、二〇一三年度より東京大学文学部・人文社会系研究科教授。言語の形式と意味の関係について、スラヴ諸語を中心に多角的に研究中。また中・東欧の言語文化、とくに旧ユーゴスラヴィアの言語と地域、社会、文化の関わりにも深い関心をもつ。文学研究は専門外だが、言語研究の中で翻訳という作業をとらえ、これにも積極的に関わっている。これまでの訳書にS・ドラクリッチ『バルカン・エクスプレス』（三省堂、一九九五年）、M・パヴィッチ『帝都最後の恋』（松籟社、二〇〇九年）『修道師と死』（松籟社、二〇一三年）

宮下　遼（みやした　りょう）

一九八一年、東京都生まれ。東京外国語大学トルコ語専攻科卒業、東京大学大学院博士後期課程単位修得退学。現在は大阪大学言語文化研究科准教授。専門はトルコ文学（史）、文化史。単著に『無名亭の夜』（講談社）、訳書にオルハン・パムク『無垢の博物館』、『わたしの名は赤〈新訳文庫版〉』、『雪〈新訳文庫版〉』、『僕の違和感』（早川書房）他。

森　晋太郎（もり　しんたろう）

一九六七年、福岡県生まれ。アラビア語通訳・翻訳者、東京外国語大学非常勤講師。シリアのダマスカスに一九八九年から二年間、レバノンのベイルートに一九九九年から二年間留学。この二つの国を中心にアラブ近現代文芸に関心を持っている。

柳谷　あゆみ（やなぎや　あゆみ）

一九七二年生まれ。慶應義塾大学文学研究科後期博士課程単位取得退学。専攻は中世イスラーム世界の政治史だが（最近の論文は「ザンギー朝ヌール・アッディーン政権における有力アミールの配置と移動」『東洋史研究』75-2（2016）掲載）、二〇〇五年にフランス・アラブ研究所（ダマスカス）に留学したところ、文学色の強い教授・講師に恵まれて現代アラブの小説を読みかじるようになり、ターミルの小説の面白さを知る。翻訳に Riḥla ma'a al-Haiku（Ḥassan 'Abbās との共訳。Dimashq : Dār Alif lil-Thaqāfa wa al-Nashr, 2008）、『現代シリアの短編小説　ザカリーヤー・ターミル著『酸っぱいブドウ（ヒスリム）』』（上智大学アジア文化研究所 Occasional Papers series:19. 二〇一六年）など。現在はイブン・ハルドゥーン『自伝』研究会、イブン・ファドル・アッラー・ウマリー研究会にて十四世紀アラブ知識人たちの著書の翻訳にも参加している。二〇一七年末ごろ、ザカリーヤー・ターミル『酸っぱいブドウ／はりねずみ』（白水社）を刊行予定。

山本　薫（やまもと　かおる）

アラブ文学研究。東京外国語大学ほか非常勤講師。一九八九～九〇年にシリア、一九九七～二〇〇〇年にエジプトへ長期留学。二〇〇二年に『前イスラーム期アラブの盗賊・無頼詩人サアーリーク―逆転世界のヒーロー』で東京外国語大学より博士号（文学）取得。訳書にエミール・ハビービー著『悲楽観屋サイードの失踪にまつわる奇妙な出来事』（作品社、二〇〇六年）、ラシード・ダイーフ著「眠気と眠りのあいだの狙われた空隙」（中東現代文学研究会編『中東現代文学選２０１２』収録、抄訳）。エジプトやパレスチナを中心に、文学以外にも音楽や映画など、アラブ圏の文化・芸術について幅広く研究・紹介を行う。ここ数年は、レバノン内戦の記憶をテーマにした小説の研究に取り組んでいる。

装丁・本文デザイン
松村紗恵〈(株)プラメイク〉

編集
羽切友希、呉　玲奈〈(株)プラメイク〉

中東現代文学選2016

2017年3月21日発行　初版第1刷発行
編　者　岡　真理（中東現代文学研究会）
発行者　岡　真理
発行所　〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学大学院 人間・環境学研究科
岡　真理研究室気付
中東現代文学研究会
電話／ FAX 075-753-6641

ISBN 978-4-908679-02-5
出版協力　(株) ユニオン・エー
印刷／製本　(株) コームラ

※本文学選は、科学研究費基盤研究 (B)「現代中東における「ワタン（祖国）」的心性をめぐる表象文化に関する発展的研究」（2015-2018年度、研究代表者　岡　真理）の成果の一部です。